山野河海のアイヌ史　第５回

湿原に寄り添

湿原に寄り添うコタン

湿原というと、多くの人がまず名前を思い浮かべるであろう釧路湿原をはじめ、霧多布湿原、サロベツ湿原など、北海道東部、北部にあるほとんどの湿原の周囲には、擦文時代[※1]の遺跡が分布しています。知床半島の南端に位置する標津町に残された標津湿原にも、擦文時代の竪穴群を含む、大規模竪穴住居跡群標津遺跡群が隣接し、遺跡とその周辺の自然環境が一体的に保存されています[※2]。擦文時代の集落は、江戸時代に和人が蝦夷（えぞ）地に進出し、漁場を拓く以前の、アイヌの人々のコタンの場所と重なるといわれています[※3]。開拓時代、その帯水性により農地開拓を阻み、厄介者として見做（みな）されていた湿原の多くに、かつてのコタンが寄り添うように残されているのです。コタンに暮らしたアイヌの人々にとって、湿原とはどのような存在であったのか。北海道に特徴的な自然環境である湿原は、生物多様性の観点から取り上げられることが多いですが、今回はアイヌ文化の視点から湿原をみてみたいと思います。

アイヌは湿原をどう認識していたか

ラムサール条約の中で、湿地は「天然のものであるか人工のものであるか、永続的なものであるか一時的なものであるかを問わず、更には水が滞っているか流れているか、淡水であるか汽水[※4]であるか鹹水（かんすい）（海水）であるかを問わず、沼沢地、湿原、泥炭地又は水域をいい、低潮時における水深が６ｍを超えない海域を含む」（第１条１）場所とされ、海洋沿岸域や内陸など、環境の違いに応じて42の湿地分類が示されています[※5]。今回のテーマである湿原は、この多様な湿地環境の内、ラムサール条約の分類では、「U 樹林のない泥炭地。灌木（かんぼく）のある、または開けた高層湿原、湿地林、低層湿原。」に相当し、多湿・低温の場所で発達した泥炭層の上に広がる草原のことを指します。湿原は更に、水域との高低差により、地表面と水面の高さがほぼ同じ低層湿原と、地表面が水面よりも高い高層湿原、そして低層湿原から高層湿原への遷移途中にある中間湿原の３つに区分されます。

天然記念物標津湿原

多様な湿地環境に対し、アイヌの人々は「アトゞ イ・チチャイ（浅海域）」「カマソ（岩礁）」「オタ・モイ（砂丘ほか）」「サノゞトゥフ（河口域）」「ナイまたはペッ（川）」「ト（湖）」などの言葉で表現して認識していました。そして湿原に相当する環境に対しては「サゞ」、「ニタッ」という表現が用いられています。この内「サゞ」は、沙流（さる）川や、サロベツ原野、斜里（しゃり）などの地名の語源といわれ、チセ（住居）の材料となるヨシが繁る沼沢地を指します。湿原の区分では低層湿原に属する場所に対する表現です。一方「ニタッ」は、灌木や谷地坊主などが確認できる場所を指し、中間湿原、高層湿原や、湿地林などに対する表現です[※6]。

※１　当誌2016年10月号「山野河海のアイヌ史」第１回参照。
※２　小野哲也 2016『ポー川史跡自然公園の自然・歴史・文化』標津町教育委員会。
※３　小野哲也 2012「道東についての予察-標津遺跡群を題材に」『アイヌ文化期の「集落」研究』北海道考古学会2012年度研究大会要旨集。
※４　**汽水**
淡水と海水がまじり合った塩分の少ない水。

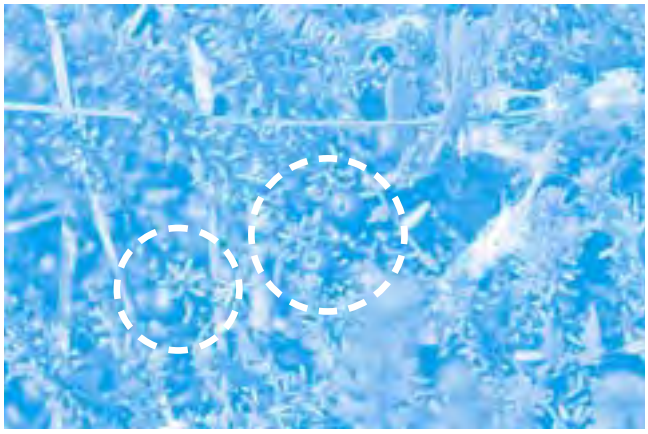
い生きた人々

小野　哲也（おの　てつや）
標津町教育委員会管理課文化財保護担当係長
標津町ポー川史跡自然公園学芸員

1974年東京都八王子市生まれ。2001年北海道大学大学院文学研究科修士課程修了後、千歳市埋蔵文化財センター、厚真町教育委員会を経て09年より標津町教育委員会学芸員として勤務。史跡標津遺跡群と天然記念物標津湿原の保護と活用に携わる。研究分野は考古・民族誌の接触領域におけるアイヌ文化史研究や、幕末会津藩北辺防衛史等北方領土隣接地域の近世・近代史など。

湿原の有用植物

アイヌの人々は自然の中に生育する多種多様な動植物資源を、巧みに生活の中に取り入れて暮らしていました。先に触れた標津町に残る標津湿原は、高層湿原と中間湿原を主体とする湿原で、アイヌ語では「ニタッ」として表現される場所です。この湿原に自生する植物の中で、アイヌの人々に利用されたものをいくつかあげてみると、まず綿毛が保温剤やマット代わりに用いられたワタスゲがあります。タチギボウシや初夏の北海道を彩るゼンテイカは食用に利用されていましたし、イソツツジの葉は煎じてお茶のようにして飲まれていました。また高層湿原に特徴的なミズゴケは、その吸水力を活かし、赤ちゃんのおむつや、丸木舟の隙間を塞ぐ充填剤として利用されていたそうです※7。このように、「ニタッ」にはアイヌの人々にとって有用な様々な植物が生育していましたが、中でも興味深い植物がガンコウランです。高山植物の１つであるガンコウランは、通常人里離れた高山地帯に自生する植物ですが、北海道東部、北部では、標津湿原をはじめ、標高３～４mの低地でも見ることができ、アイヌの人々が暮らしたコタンのすぐ近くに自生しています。アイヌの人々はこのガンコウランの黒味ある濃い紫色の実を、食用だけでなく、その果汁をアツシと呼ばれる衣服を紫に染める染料にも利用したといいます。寛政４年（1793）の『夷諺俗話（いげんぞくわ）』には、このガンコウランの実で染められたアツシを見て、「色合至て見事にて、矢張江戸紫の如し」と、当時最先端を誇った江戸の紫染めにも劣らぬ、薄紫の色合いを賞賛した記述があります。それからおよそ70年後の万延元年（1860）に松浦武四郎※8が記した『天塩日誌』にも、ガンコウランの実による染色法を知る、天塩川筋の山中に住むアイヌ女性が紹介されています。しかし、この頃には本州から移入された木綿織物の普及により、既にアイヌの伝統的紫染めを知る者がいなくなっていることが記録されています※9。ガンコウランによる紫染めが行われたアツシは、現在伝わるアイヌ民具には確認できません。記録に残りつつも、交易の進展により失われたアイヌの伝統文化の１つとして、ガンコウランの実の利用法は興味深い技術です。


ガンコウランの実

開拓時代に厄介者扱いされてきた湿原ですが、この地の自然と向き合って生き続けてきたアイヌの人々にとっては、食用、薬用の様々な資源を得る場所であると共に、暮らしの中に色彩の豊かさを提供する存在だったようです。

※５　環境省ホームページ「ラムサール条約と条約湿地」より。
※６　萱野茂 1996『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂、田村すず子 1996『アイヌ語沙流方言辞典』草風館、吉原秀喜 2014「湿地とアイヌ文化　沙流川から」『湿地への招待～ウエットランド北海道』北海道ラムサールネットワーク編　北海道新聞社。
※７　知里真志保 1976「分類アイヌ語辞典植物編・動物編」『知里真志保著作集別巻Ⅰ』平凡社。

※８　**松浦武四郎**
〔1818-1888〕江戸末期の探検家。蝦夷地に関心を持ち、しばしば訪れて多数の紀行文や地図を残した。
※９　河野広道 1931「アイヌの織物染色法」『蝦夷往来』３　再録『北方文化論河野広道著作集』Ⅰ。